

第四節 酒々井地方の中世城跡

一 本佐倉城跡

本佐倉城と千葉氏

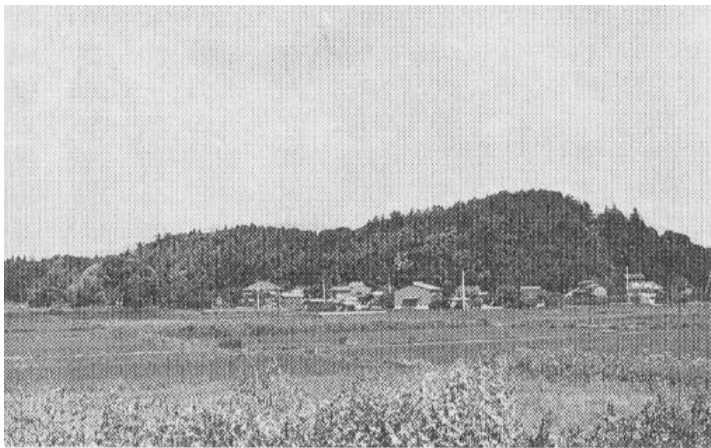
本佐倉城は、酒々井町本佐倉將門山台地が、東方へ延びる、標高三〇メートル余りの半島状台地上に構築されている。北方に印旛沼が流れ、それによって形成された湿地帯が、東方から南方へと進み、三方を囲んで、西方が台地に接している。東西約六五〇メートル、南北約七五〇メートルを城域としている。当地方としては最大の規模をもつ城であり、下総地方第一の豪族千葉氏宗家の居城である。築城年代等については諸説があるが、文明年間（一四六九〜一四八六）末の頃、千葉介輔胤によって築城されたとみ

るのが通説のようである。輔胤は千葉介を嗣ぐ以前を岩橋殿と称されており、この付近の地形に詳しくかっと思われ、將門山の自然的要害性を見込んで、この地に築城したものと考えられる。輔胤の築城以後、城主は孝胤・勝胤・昌胤・利胤・親胤・胤富・邦胤・重胤と続いたが、天正十二年（一五九〇）重胤の時、豊臣秀吉による小田原の役をむかえて、千葉氏は北條氏に味方して、小田原に出陣し、北條氏の滅亡と共に運命をともにした。ここに一〇〇有余年続いた本佐倉城の歴史も終ることになる。

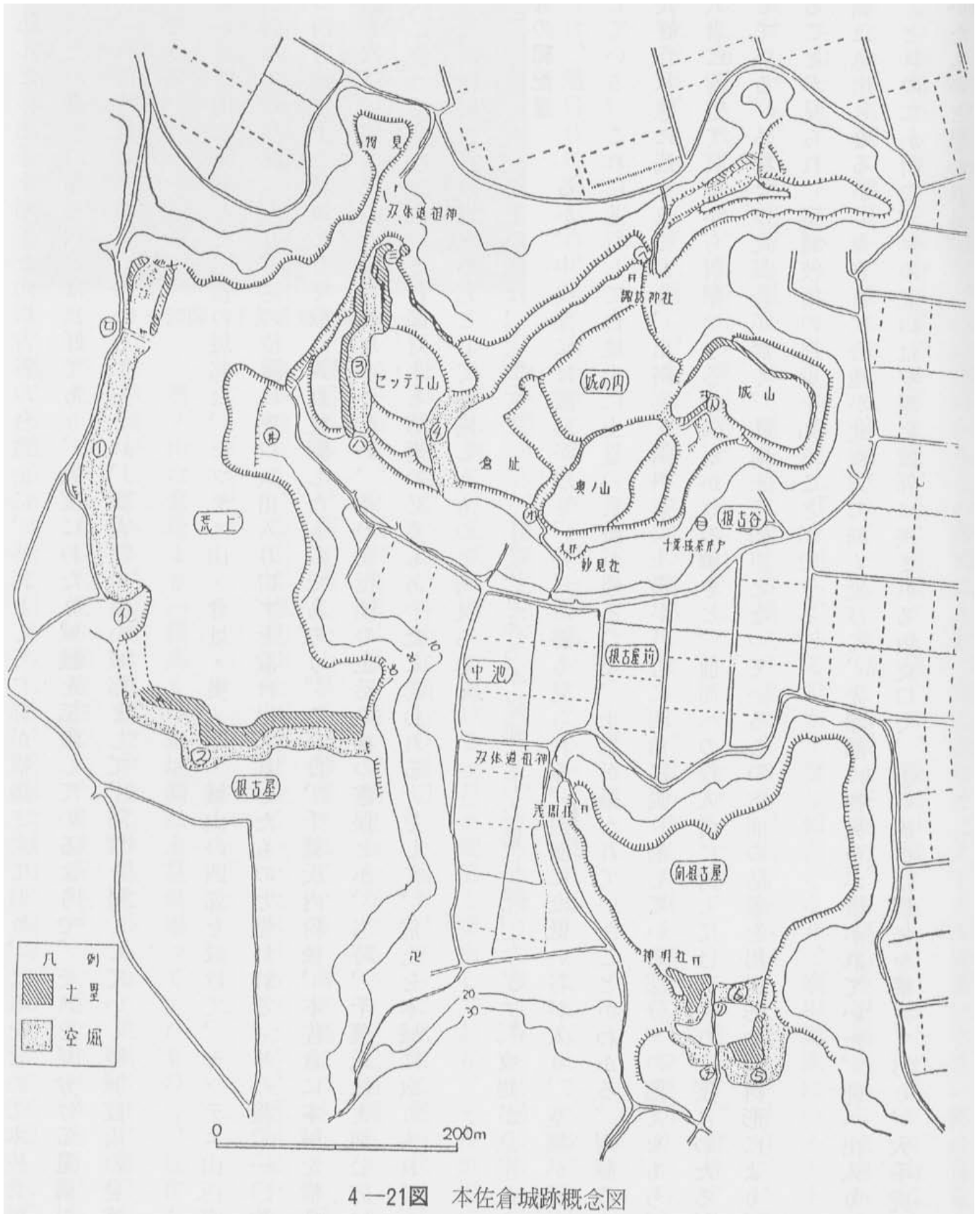
城域

本佐倉城の城域は半島状台地先端より、城山・奥ノ山・倉址・セ

ツテエ山と呼ばれている郭と、荒上の地に城域最大の郭の五郭が直線的に並び、それに付属する腰郭や帯郭（台地上の郭から一段下の中段に設けられた郭）、物見台などが構築されて本城としている。そして、奥の山南方に低



4—20図 本佐倉城跡遠景



4-21図 本佐倉城跡概念図

く入り込んだ湿地帯を隔てた向根古谷の台地上に、外郭として二郭が構築されており、これを含めて本佐倉城の城域とした。その遺構の保存状態は良好であり、数度にわたり城域を拡張しているようで、それを見分ける遺構がモ越されており、戦国時代の築城がいろいろ工夫され、要害性の高い城郭として、防御を堅くしていく築城技術の発達を知ることができる。

輔胤が将門山に築城した当初の城郭は、セツテエ山・倉址・奥ノ山・城山の四郭を設けて、セツテエ山西南の地点付図④から③の空堀に入り、⑤の位置に虎口（出入り口）を設け出入りしたものである。その後、一〇数年たつてから西方の荒上を城域として取り入れ整備したものであろう。これは、千葉氏内紛後、本佐倉に本城を構えると、家臣団も次第に集まってくるようになったため、その家臣団の生活の場の確保とか、当時、千葉氏は古河公方について上杉氏と争っていたため、それに対する防御の必要もあつたと思われる。そして、荒上を本城に取り入れてから後、親胤の代に向根古谷の地を外郭として整備したものと考えられる。

内郭の郭配置

荒上の郭は、南北三〇〇メートル余りあるが区画された跡は見当たらない。東側が急崖となつているが、中央部には腰郭が残り、井戸の跡も見られる。西側には低い谷が入り、空堀が見られたが埋没している。これに併行して台地上に土塁の痕跡が残るので、土塁が築かれていたことがわかる。南側の土塁・空堀は良好な状態に残されており、出柵形・隅柵形（土塁が外方に四角に張り出している部分）の備えをもち、空堀への侵入者に対して真横から射撃できる横矢がかりの働きと、前面への侵入者に対しては、一八〇度にわたる射撃を可能にしている。外部との比高差が無く、防衛上の弱点となつているこの方面の防禦を出柵形や隅柵形により、強化していることが見られ、築城技術の進歩を知ることができる。

北側は急崖となるが、東寄りに台地が北東方に補足延びて、先端に物見台が置かれていた。郭へ出入りする虎口は、④と⑤の二か所で、⑤の虎口は空堀と腰郭に挟まれる坂虎口で、④の虎口は横矢を構えており、大手虎口が置かれていたものと思われる。



4-22図 本佐倉城空堀の一部

セツテエ山の北側は腰郭で、㊦の虎口からこの腰郭に入り、東に進むと二メートル位高い小さい郭に登ることになる。この小郭からセツテエ山に通じている。また、㊤の空堀にも通じて、横矢の働きもしている。セツテエ山には土塁が見られない。南側に腰郭が二段に分けて構築されている。東側と西側は空堀で、西側㊢の空堀底からは南から北へ、セツテエ山を九メートルから七メートルも見上げながら、ゆるやかな登り傾斜となり、途中堀底に一メートル位の段差を設けている。また空堀を屈曲させて侵入者に対する横矢の構えもある。根古谷から㊦を登り、虎口㊥に至る堀底道として利用されていた。東側㊤の空堀はセツテエ山を七メートル、倉址を一〇メートルに見上げ、南進すると二メートル位下の平場から人家に通じ、北に進と倉址の腰郭となって、諏訪神社の裾を廻って㊦の堀切りから倉址に入る。

倉址は、段階上に築かれ、南に向かって高くなる。一番高いところから焼米が出土したと伝えている。倉址と奥ノ山の間から、南側崖を下って妙見社、さらに降りて根古谷へと通じる細道がある。西側には北東に向って延びる土塁が幅広く突出しており、その先端に諏訪神社が祀られている。神社北側㊦の堀切りを隔て、さらに北東に尾根状に延びる台地がある。尾根中央部が最も高く、物見台となっていた。北西側五メートル下に腰郭があり、削り残した土塁が一部残されている。南東側は二メートル低く削平地が造られ、ここに物見の松と呼ばれていた大木があったが、昭和五十六年に枯れてしまった。

奥ノ山は倉址より一段高く、倉址側に土塁が廻っていたもので、現在もその一部が残存している。南側は急崖で中段に妙見社がある。東側には、腰郭を二段に構え、その下方の人家の敷地内に「千葉様茶井戸」と呼ぶ井戸があり、奥ノ山に通じる道もあったと伝えられる。北側は城山と堀切りによって区切られている。

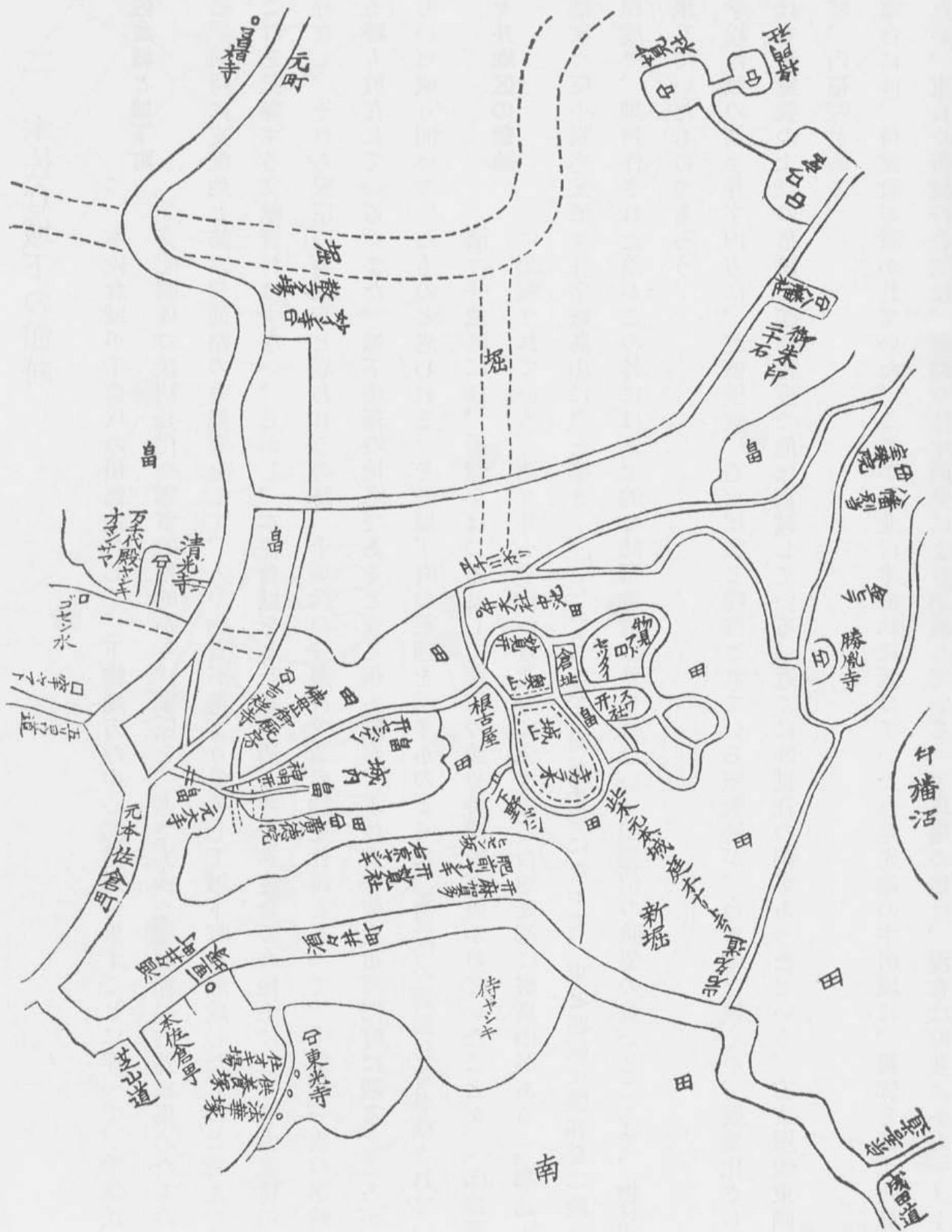
土地ではこの奥ノ山を本丸跡と伝えるが、城主は奥ノ山に居館を置き、日常の生活の場に当て、城山をいざという時の詰の城に当てていたものと思われる。奥ノ山中央部の倉址寄りにはカラカサ松と呼ばれていた大木があったが、大正十二年に枯れたという。

城山に入るには、堀切りからの一か所で、城山の裾から三〇メートル程坂を登り虎口に至る。途中通路の右側に崖状に落ち込む箇所を設け、通路を狭くして、城山からは侵入者の側面を突く横矢が仕掛けられ、城山の侵入を困難なものにしている。虎口は正面の崖によって遮られ、左に折れる坂虎口となって、侵入者に対して三方からの掃射を可能にして、守備に容易な備えとなっている。城山の四方すべて土塁を設けたようで、南側は痕跡程度であるが、東側から北側、西側に現存している。南側中央部から東側へ、さらに北側へと廻る带状腰郭を六メートルから七メートル下の中段に設けている。城山は本城中最も要害性の高い郭であり、ここが詰の城であったことは間違いない。

外郭―向根古谷― 本城の南方台地、向根古谷に構築された外郭は、小さな郭と大規模郭の二郭で形成されている。小郭の周囲は空堀により区切られるが、大規模郭の周囲は崖により囲まれ、郭内には区画された跡はみられない。外郭で特徴的なのは虎口の土橋の幅が広く、空堀の規模も大きい。土塁が高く上面の幅も広く設けられ、虎口からの侵入者に高い位置から横矢をかけると共に、前面に対する掃射の範囲を広げている構えなどで、ここにも築城術の変遷を見ることが出来る。荒上を本城に取り入れた後、サイドの拡張により外郭として整備されたものと考えられる。

「妙見実録千集記」（『房総叢書』所収）に「千葉第廿八代、親胤（略）此ノ代有所以、本城ノ南ノ方ニ小城ヲ築クト云ヘリ。」と記載されているが、この向根古谷の虎口への築城を示すものと思われる。『成田名所図絵』の「本佐倉村千葉家故城址之図」には、向根古谷の虎口が本佐倉城の大手であるとしている。また、本佐倉地区に「向根古谷の台地と奥ノ山に吊り橋が架けられていた」と伝承もあるからして、向根古谷から本城へ通じる通路として、当時湿地であった中池付近に、取り外しのできる板橋のようなものが架けられ、往来できるようになっていたものと考えられる。

本佐倉村千葉家故城址之圖



4-23 本佐倉村千葉家故城址之圖 (『印旛郡誌』より)